聖書は肉食・動物をどう扱っているか

——シナイと荒れ野の旅：出エジプト記・レビ記，民数記・申命記——

奥 田 和 子

How the Bible Treats the Eating of Meat and Animals

——Long Journey to Sinai and the Desert : Exodus · Leviticus · Numbers · Deuteronomy——

OKUDA Kazuko

Abstract : According to the Book of Genesis, the food that God gave to human beings was "vegetable food — plants with seeds, namely grains and fruit". However, after Noah's flood, God gave human beings permission to eat meat, with some restrictions. The Book of Deuteronomy 12 : 20–22 says as follows : You may eat as much meat as you want". It is said to be a compromise given to human beings by God. I concretely considered how this compromise was carried out.

I examined the history of meat-eating after Genesis through the Books of Exodus, Leviticus, Numbers and Deuteronomy. I came to the conclusion that meat was eaten in exact accordance with the regulations which God established. Fundamentally people were requested to be sacred in the context of God's sacredness. Meat-eating was no exception and was treated within the frame of sacredness. In concrete terms, the regulation was strict not only about the kinds of meat, but also "where", "who", what" and "how much". Meat was the offering to God at the ritual service. Some of the meat offered to God was burnt, but in most cases the remainder was eaten by the people in the company of God, in the tent. People arrived at compensation, atonement, or reparation in the presence of God. Meat was eaten for justifiable reasons,not by the people's thoughtless free will.

は じ め に

前報告では創世記における肉食・動物の扱いについて述べた。すなわち，はじめ神が人々に与えた食べ物は植物性のものに限られた（創世記 1 : 29–31）。しかし，ノアの洪水のあと神は肉を食べることを条件付きで許した（創世記 9 : 1–8）。ではどのような条件のもとで人々は肉を食べたのか。

ここでは，出エジプト記，レビ記，申命記，民数記に記された神の肉食への指針と人々の肉食の状態を中心に探る。あわせて，動物の位置づけや人々の動物の扱いについても触れたい。

まず，出エジプト記，レビ記，身命記，民数記についてあらかじめ述べたい。

飢饉のため食べ物に不自由したイスラエルの人々はエジプトに移住したが，その後しだいに人口が増加した。かれらの仕事は賦役労働であった。賦役労働とは公の物を建てるのに一定期間課せられる労働である。神はこのイスラエルの民を奴隷状態から救い出すためにエジプトから脱出させ，新しい土地に導こうとされた。その結果，40 年間シナイの荒れ野を経由して神が約束する目的の地（カナン）をめざす旅を続けた。これが出エジプト記である。

民数記はエジプトを脱出したイスラエルの民が荒れ野で 40 年間を過ごした後，ヨルダン川の東岸に至るまでの歴史の書である（2 p. 243）この民数記では人口調査が二度行われる。一度目はシナイの荒れ野で，

二度目は旅の終わりごろにカナンの土地分割の準備のためにモアブの平野で行われた。イスラエルはすでに完全に組織された聖なる共同体とみなされその中心になるのがレビ人であった。このレビ人を中心に，必要に応じて神と語る臨在の幕屋が運営され（2 pp. 245–246），レビ記には祭司制度，儀礼，祭，断食，清潔，聖性に関する規定が述べられている。

申命記はモーセが死ぬ前にイスラエルに語った「遺言」であるといわれる。申命記の中心は律法であり，この律法は歴史のただ中で神によって与えられたものが原点であるとされる。（2 pp. 292–293）

なお，イタリック体は聖書の原文の引用である。下線やゴシックは筆者によるものである。

Ⅰ　肉　　食

1　出エジプト直前に過越の肉を食べる

主の過越

出エジプト記 12：3–11

エジプトの国で，主はモーセとアロンに言われた。

……今年十日，人はそれぞれ父の家ごとに，すなわち家族ごとに小羊を一匹用意しなければならない。もし，家族が少人数で小羊一匹を食べきれない場合には，隣の家族と共に人数に見合うものを用意し，めいめいの食べる量に見合う小羊を選ばなければならない。その小羊は，傷のない一歳の雄でなければならない。用意するのは羊でも山羊でもよい。それは，この月の十四日まで取り分けておき，イスラエルの共同体の会衆が皆で夕暮れにそれを屠り，その血を取って，小羊を食べる家の入り口の二本の柱と鴨居に塗る。そして，その夜，肉を火で焼いて食べる。……これが主の過越である。

これでわかるように，家庭で食べることができるのは，主の過越であり，年1回限りである。その他には，むやみに家庭では食べることはできない。

小羊を選ぶのは，丸ごと焼いて夜中（夜じゅう）に食べてしまわなければならなかったからである。そのために食べきれる小さめの物ということであろう。申命記（16：7）出エジプト記（29：31）では肉を「煮ている」のにたいしてここでは煮ないで「焼く」のは，この過越しが特別のものとして扱われているからである。（2 p. 141）「煮る」のは，中央聖所の大釜で煮られた。（2 p. 326）鴨居に血を塗るのは，悪魔が入って来ないようにするためである。（2 p. 140）

過越祭の規定

出エジプト記 12：46

一匹の羊は一軒の家で食べ，肉の一部でも家から持ち出してはならない。またその骨を折ってはならない。

2　肉の入った肉料理が食べられなくなった荒れ野の旅

出エジプト記 16：2–3

イスラエルの人々の共同体全体はエリムとシナイとの中間にあるシンの荒れ野に向かった。

荒れ野に入ると，イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。イスラエルの人々は彼らに言った。

「我々はエジプトの国で，主の手にかかって，死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り，パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れだし，この全会衆を飢え死にさせようとしている。」

イスラエルの人々のこの言葉はエジプトでの生活を美化しているという。賦役労働を強いられた外国人労働者がいつも肉の入った鍋料理をたっぷり食べることなどまずありえない。しかし，エジプトでは食べ物が手に入るかどうか心配する必要がなかったのは事実である。（2 p. 148）

しかし，いずれにしても旅の道中食べ物が充分になかったのであろう。

3　渡り鳥－うずら（鶉）の肉を腹一杯食べる

モーセは民の不平に注意を促す一方で，神から特別に食べ物をいただくことを予告する。

出エジプト記 16：8–13

モーセは更に言った。「主は夕暮れに，あなたたちに肉を与えて食べさせ，朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は，あなたたちが主に向かって述べた不平を，聞かれたからだ。一体，我々は何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく，実は，主に向かって不平を述べているのだ。」

……夕方になるとうずらが飛んで来て，宿営を覆い，朝には宿営の周りに露が降りた。

うずらはシナイ半島に現在も見られる。うずらは春と秋の渡りの時期にシナイ半島に大量にいるが，それ

以外の所にも時にもいる。(2 p. 148)

民数記 11：18–20

民に告げなさい。明日のために自分自身を聖別しなさい。あなたたちは肉を食べることができる。主の耳に達するほど，泣き言を言い，誰か肉を食べさせてくれないものか，エジプトでは幸せだったと訴えたから，主はあなたたちに肉をお与えになり，あなたたちは食べることができる。あなたたちがそれを食べるのは，一日や二日や五日や十日や二十日ではない。1か月に及び，ついにあなたたちの鼻から出るようになり，吐き気を催すほどになる。……

そして現実に肉が降ってきたのである。

民数記 11：31–32

さて，主のもとから風が出て，海の方からうずらを吹き寄せ，宿営の近くに落とした。うずらは，宿営の周囲，縦横それぞれ1日の道のりの範囲にわたって，地上二アンマほどの高さに積もった。民は出ていって，終日終夜，そして翌日も，うずらを集め，少ない者でも十ホメルは集めた。そして宿営の周りに広げておいた。

4　主が導くカナンの地と食べ物，それは植物性の食べ物のみ

神の贈る良い土地の食べ物とは

モーセはこれからイスラエルの民が導かれるであろう目的の地がいかに良い土地であるかを述べる。それは食べ物を生みだし，水を生みだす良い土地であるという。

神の贈る良い土地

申命記　8：8–10

「小麦，大麦，ぶどう，いちじく，ざくろが実る土地，オリーブの木と蜜のある土地である。不自由なくパンを食べることができ，何一つ欠けることのない土地であり，……」

この文中の食べ物はすべて植物性のものであり，家畜とか肉といった言葉が全くないことに注目したい。

5　清い動物を食べよ，汚れた動物は食べるな

清い動物と汚れた動物

申命記 14：3–8

すべていとうべきは食べてはならない。食べてよい動物は次のとおりである。牛，羊，山羊，雄鹿，かもしか，子鹿，野山羊，羚，大かもしか，ガゼル。その他ひずめめが分かれ，完全に二つに割れており，しかも反すうす動物は食べることができる。ただし，反すうするだけか，あるいは，ひずめが分かれただけの動物は食べてはならない。らくだ，野兎，岩狸。これらは反すうするが，ひずめが分かれていないから汚れたものである。いのしし。これは，ひずめが分かれているが，反すうしないから汚れたものである。これらの動物の肉を食べてはならない。死骸に触れてはならない。

反すうする動物，しかもひずめが完全に分かれた動物は草食動物である。

6　家畜化－家畜を食べて満足せよ

祝福と呪い

身命記 11：14–15

……あなたには穀物，新しいぶどう酒，オリーブ油の収穫がある。わたしはまた，あなたの家畜のために野に草を生えさせる。あなたは食べて満足する。

ここには家畜がでてくる。家畜という言葉には，肉だけでなく乳が含まれると考えられる。牛・羊・山羊の母親は乳を新生子に与えた後，新生子は生後3ケ月に成長してやわらかい草を食べることができるようになる。すると，母の群れは余分の乳を人間に提供し同時に毛や皮も提供する。家畜化とその後の乳利用により「殺して肉を食べる」という「殺し・流血の必然」回路に加えて「殺しと直接つながらない搾乳」という「殺し・流血をともなわない」回路を持つことができるという。こうした乳利用の開始は，〈流血をともなう動物食〉と〈流血をともなわない動物食〉という2項対立的範列（清／穢または無罪／有罪）の措定を可能にし，自己の存在に関わるテーマとして，〈殺しをめぐる倫理〉を対自化させる道をも開いた。その点で，乳利用の開始は自己の生を支える自然にたいするナチュラル・イデオロギーという文脈でも，無視できない含意をもった文明史的出来事だったと言いうる。(4 pp. 134–135)。

7　血を食べてはならない

犠牲の血と肉

申命記 12：15–16

ただし，どの町においてもあなたの神，主が与える祝福に従って，欲しいだけ獣を屠り，その肉を食べることができる。かもしかや雄鹿を食べる場合のように汚れている者も清い者も食べること

ができる。ただし，その血は食べてはならず，水のように地面に注ぎ出さねばならない。

血は神との契約の印であり献げ物である。すなわち，民がエジプトを出るとき鴨居に血を塗り，災難から逃れたこと（出エジプト記12：7），シナイ山のふもとに祭壇を築き雄牛の血を鉢に入れ民に振りかけて神と契約を交わしたこと（出エジプト記24：6～8），アロンは年に一度，祭壇の四隅に献げ物の血を塗って罪の贖いの儀式を行うこと（出エジプト記30：10）などである。

動物の命は血の中にあり，血は神に属するもので，人間には属さないため食べてはいけないとされた。別の解釈に，「ただし，その血は……」は，異教の慣習と混同する危険を排除する技術的な指導内容である。この指導と監督を行ったのが，役人として登用され，地域に派遣されたレビ人祭司である。（2 p. 320）血は「水のように注ぎだす」というのは十分血を除き，放血すると肉が血臭くなく，味もよく，食肉としてもっとも適当であるばかりでなく，また保存にもよく耐えるものなのである。屠殺後血が凝結しない前に手早く血を抜き取るユダヤ式屠殺法は今日でも踏襲されているという。（5 pp. 335～338）ただし，主が与える祝福にしたがってどの町においても肉は食べてもよいと記されている。血を食べてはいけないという掟が述べられている。

8　汚れている者は食べてはならない－清い者だけが肉を食べることができる

民数記11：18

民に告げなさい。明日のために自分自身を聖別しなさい。あなたたちは肉を食べることができる。……

「自分自身を聖別しなさい」という意味は，モーセは民にたいして約束の新鮮な肉は聖なる食べ物であるから，それを食するために民は祭儀的に清くなければならない（創世記35：2，出エジプト記19：10）という。（2 p. 261）

清くなるとは，創世記35：2では身につけている外国の神々を取り去り，身を清めて衣服を着替える。民数記31：19–24では，火に耐えるものは火の中を通すと清くなる。それ以外のものは，清めの水で汚れを清める。衣服を洗うとあなたは清くなる。出エジプト記19：10は…彼らを聖別し，衣服を洗わせ…である。この聖別の解釈は，自己を清めること，神の顕現にあずかり，祭儀に参列する前に，神の聖とは両立しがたいあらゆる不浄から身を洗うことである（3 p. 499）この肉は神からの授かりものであり，むやみやたらに食べる物ではなく身を清めてから食べるという特例として位置づけられる。

9　肉食の許可－汚れている者も清い者もその肉を食べることができる

犠牲の肉と血

申命記12：20–22

約束されたとおり，あなたの神，主があなたの領土を広げられるとき，肉が食べたいと言うなら，欲しいだけ肉を食べることができる。あなたの神，主がその名を置くために選ばれる場所が遠く離れているならば，わたしが命じたとおりに，主が命じたとおりに，主が与えられた牛や羊を屠り，自分の町で，欲しいだけ食べることができる。かもしかや雄鹿を食べる場合のように食べることができる。汚れている者も清い者もその肉を食べることができる。

主があなたの領土を広げられるときとは，おそらくヨシュア時代の領土拡張を前提とするもので，…占領地支配が行政上の課題となり，同化政策の必要から，占領民に肉食の世俗化を許可し，その他の献げ物を中央聖所へ奉納することを命じたもの。（2 p. 321）

どの町においても…その肉を食べることができるのは，祭儀集中の見返りとして，一般の町での屠殺を認めたもの。汚れている者でも清い者でも食べることができるとあり，世俗化された非儀礼化された肉食の許可である。この指導と監督を行ったのが，役人として登用され，地域に派遣されたレビ人祭司である。ここにも，儀礼一辺倒の宗教改革でなく，法治主義的あるいは行政的な傾向が認められる。（2 p. 320）

かもしかや雄鹿については，「このことは，かもしかや雄鹿はそれ以前に食べられていたということである。羊，山羊にたいする人との関わり方には，1狩猟段階　2家畜化段階　そして3家畜からの乳の利用段階という3つの段階が考えられる」という。（4 pp. 92–93）まず狩猟段階があって，次第に家畜化していく。

また汚れている者もということは，それ以前には汚れている者は肉を食べてはいけなかったのである。

10　ただし主の祭壇に行きその御前で肉をささげてから食べよ

犠牲の血と肉

申命記 12：17～18

…牛や羊の初子，あなたが誓いを立てた満願の献げ物，随意の献げ物，収穫物の献納物などを自分の町の中で食べてはならず，ただ，あなたの神，主の御前で，あなたの神，主の選ばれる場所で，息子，娘，男女の奴隷，町の中に住むレビ人と共に食べ，主の御前で，あなたの手の働きを喜び祝いなさい。

申命記 12：26–28

ただ，あなたは，ささげるべき聖なる献げ物と満願の献げ物を携えて，主の選ばれる場所に行かねばならない。焼き尽くす献げ物の場合は，肉も血もあなたのの神，主の祭壇にささげる。その他のいけにえは血をあなたの神，主の祭壇の側面に注ぎ，肉は食べることができる。わたしが命じるこれらのことをすべて聞いて守りなさい。……

ここでは，食べる場所が明らかにされている。主の選ばれる場所，祭壇をさす。主の教えを守ったうえで食べなさいという。このように肉を食べるには，さまざまな制約があった。

主の選ばれる場所というのは，申命記特有の表現で中央聖所のことである。《あなたは自分の好む場所で……献げ物をささげないように》と呼びかけられているのは，祭司である。……儀礼は祭司と民の共同の業であるため，祭司が中央聖所でささげるのであれば，民もまたそこへ赴かなければならない。それゆえ，この規定の本質は祭儀集中を実施することにある。(2 p. 320)

11　神の御前で食べる

契約の締結

出エジプト記 24：1–5

主はモーセに言われた。「あなたはアロン，ナダブ，アビフ，およびイスラエルの七十人の長老と一緒に主のもとに登りなさい。あなたたちは遠く離れて，ひれ伏さねばならない。しかし，モーセだけは主に近づくことができる。……モーセは……山のふもとに祭壇を築き，……焼き尽くす献げ物をささげさせ，更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。

犠牲の動物を祭壇上ですべて焼き尽くしてしまうのが焼き尽くす献げ物である。しかし，和解の献げ物は脂肪の部分を祭壇上で焼いて神にささげ，残りの一部を祭司がとり，他はこの奉献に参加した者たちが食べる性質の献げ物である（2 p. 172）。

出エジプト記 24：11

神はイスラエルの民の代表者たちに向かって手を伸ばされなかったので，彼らは神を見て，食べ，また飲んだ。

これは通常の食事ではなく，神の臨在に基づく契約の食事である（2 p. 173）という。

神は見えない食事仲間として参加しているのを（人々は）知っていた。契約締結の際の儀式的食事も同じように理解されていた。神を前にして相互に結びつき，契約を結んだ（創世記 31：54）（6 p. 339）

エトロのモーセ訪問

出エジプト記 18：12

モーセのしゅうとエトロは焼き尽くす献げ物といけにえを神にささげた。アロンとイスラエルの長老たちも皆来て，モーセのしゅうとと共に神の御前で食事をした。

Ⅱ　神への献(ささ)げ物の意味
―なぜ献げ物をするのか

1　神への*献(ささ)げ物*の意味

すべては神のもの，神の創造物だから神にお返しするのである。

初子の奉献

出エジプト記 13：1

主はモーセに仰せになった。「すべての初子を聖別してわたしにささげよ。イスラエルの人々の間で初めに胎を開くものはすべて，人であれ家畜であれ，わたしのものである。」

初子とは，動物が交尾して始めて産まれる最初の子をさす。人間では第 1 子にあたる。雄と限定すれば雄の初子ということになる。

初子について

出エジプト記 13：11–12

主があなたと先祖に誓われたとおり，カナン人の土地にあなたを導き入れ，それをあなたに与えられるとき，初めに胎を開くものはすべて，主にささげなければならない。あなたの家畜の初子のうち，雄はすべて主のものである。

出エジプト記　34：19–20

初めに胎を開くものはすべて，わたしのものである。あなたの家畜である牛や羊の初子が雄であるならば，すべて別にしなければならない。……あなたの初子のうち，男の子はすべて贖わねばならない。

祭司とレビ人に対する規定

民数記18：15–19

人であれ，家畜であれ，主にささげられる生き物の初子はすべて，あなたのものとなる。ただし，人の初子は必ず贖わなねばならない。また汚れた家畜の初子も贖わねばならない。

……しかし，牛，羊，山羊の初子は，贖ってはならない。これらは聖なるものである。その血を祭壇に振りかけ，その脂肪を焼いて煙りにする。これは，燃やして主にささげる宥めの香りである。肉は，奉納物の胸の肉や右後ろ肢の場合と同じく，あなたのものとなる。イスラエルの人々が主にささげる聖なる献納物はすべて，あなたとあなたと共にいる息子たち，娘たちに与える。これは不変の定めである。これは，主の御前にあって，あなたとあなたと共にいるあなたの子孫に対する永遠の塩の契約である。

人間の血も動物の血も同様に聖なるものである。人間と動物はいわば血によってつながっている。人間の血が流されると，天に向かって復讐の叫びをあげるように，動物の血は神に保留されている（創世記9：4–6）この関係のゆえに，動物は人間に代わることができるのである。初子の奉献は，動物を犠牲とすることで置き換えられる。(7)

契約の書，祭壇について

出エジプト記20：24

あなたは，私たちのために土の祭壇を造り，焼き尽くす献げ物，和解の献げ物，羊，牛をその上にささげなさい。わたしの名の唱えられるすべての場所において，わたしはあなたに臨み，あなたを祝福する。

日ごとの献げ物

出エジプト記29：38–41

祭壇にささげるべき物は次のとおりである。毎日絶やすことなく，一歳の雄羊二匹を，朝に一匹，夕暮れに他の一匹をささげる。……燃やして主にささげる宥めの香りとする。

出エジプト記29：42

これは代々にわたって，臨在の幕屋の入り口で主の御前にささぐべき日ごとの焼き尽くす献げ物である。

幕屋でされる一般的な日ごとの献げ物である。このような献げ物がなされるのは，この場所こそ，神が神の民イスラエルと出会い，イスラエルに言葉を語りかける所に他ならないからである（2 p. 180）

犠牲の基本的意味は被造物の破壊ではなく，神に捧げることである。犠牲の実質は…ご自分のためにそれを作った方にその被造物を返すことである。被造物がその終わりの時に，その幸福を神の中に見つけるためである。……犠牲は，我々が我々の終わりに，神との合一の中に我々の真実の至福を見出そうと我々自身を捧げようとする行為であるという。(7 p. 190)

2　神への献げ物の種類

献げものには3種類ある。（表1）

1）祭司聖別の儀式

出エジプト記29：1–3

わたしに仕える祭司として，彼らを聖別するためにすべき儀式は，次のとおりである。若い雄牛一頭と傷のない雄の小羊二匹を取る。……それをみな一つの籠に入れ，1頭の雄牛，二匹の雄羊と共にささげる。

表1　献げ物の意味とおさがりの肉はだれのものか

	焼き尽くす献げ物 贖罪	喜びを基調にしたもの 和解	賠償
意　　味	罪や汚れを清める 清めの献げ物	随意の　満願の　感謝の 何か喜ばしいことがあったっとき奉納者が自由にささげる自由な気持ちから	神の所有物に対して損害を与えた場合のお返し
雄　か　雌　か	最も聖なる雄 雌より価値があると見なされていた	聖なる雌でもよい	
羊か山羊か	羊と山羊は別々に	一緒	
皮はだれの物か	祭司	奉納者	
肉はだれの物か	主のもの 他の者はだれも食べない	奉納者 胸の肉…信徒 右後ろ肢…祭司	

出エジプト記 29：15–18

*雄牛を臨在の幕屋の前に引いて来る。……雄羊を各部に分割し，内臓と四肢を水で洗い，分割した各部と頭と共に，その雄羊全部を祭壇で燃やして煙にする。これは主にささげる**焼き尽くす献げ物**であり，主に燃やしてささげる宥めの香りである。*

これは献げ物をすべて焼き尽くしてしまうもので，肉を焼く香ばしい香りを神にささげるところに本質がある（2 p. 179）。

出エジプト記 29–14

*雄牛の肉と皮と胃の中身は宿営の外で焼き捨てる。これが**贖罪の献げ物**である。*

出エジプト記 29：25

…祭壇の上で焼き尽くす献げ物の傍らに置いて煙にし，主を宥める香りとする。これが燃やして主にささげる献げ物である。

アロンとその子らの任職式を行う場面では肉を食べている。

出エジプト記 29：31–34

*あなたは任職の雄羊を取り，その肉を聖なる場所で煮て料理する。アロンとその子らは，**その肉と籠に入れてあるパンを臨在の幕屋の入り口で食べる**。彼らは，自分たちの任職と聖別の儀式に際して，罪の贖いとして用いられた献げ物を食べる。それは聖なるものであるから，一般の人は食べてはならない。もし，この任職の献げ物の肉やパンが翌朝まで残ったならば，焼き捨てる。それは聖なるものであるから，だれも食べてはならない。*

任職式での贖罪の献げ物はその当事者だけが食べることを許されている。

一連の叙任式の最後に，叙任される祭司たちは叙任の雄羊と供えられたパン，および贖罪の雄牛を煮て，共に食べる。（2 p. 179）それぞれの肉は《聖なる場所》で料理される。

《聖なる場所》とはこの式が行われる臨在の幕屋の入り口である。これは，祭司の叙任にあたって神にささげられたものを神から賜って食べるのであり，和解の献げ物に類する。これは祭司のみがこの場で食しうる聖なるものであり，一般の人が食べること，また翌朝まで残しておくことは禁じられた。この神の前での共食は，祭司叙任にあたって神との契約を締結する意味をもったと考えられる。

出エジプト記 29：42

これは代々にわたって，臨在の幕屋の入り口で主の御前にささぐべき日ごとの焼く尽くす献げ物である。

幕屋でされる一般的な日ごとの献げ物である。このような献げ物がなされるのは，この場所こそ，神が神の民イスラエルと出会い，イスラエルに言葉を語りかける所に他ならないからである（2 p. 180）

これは神にささげられたものを神から賜って食べるのであり，和解の献げ物に類する（2 p. 179）

出エジプト記 32：5–6

アロンはこれを見て，その前に祭壇を築き，「明日，主の祭りを行う」と宣言した。彼らは次の朝早く起き，焼き尽くす献げ物をささげ，和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし，立っては戯れた。

和解の献げ物は，献げ物の一部を焼いて神にささげ，一部を祭司の取り分，一部を奉献者が神の前で食べる奉献物である。神と奉献者の間に和が生じる目的である（民数記 15：1～12）。（2 p. 159）

2）民数記における献げ物の規定

民数記には献げ物について書かれた箇所が 4 箇所ある。

ナジル人が誓願するときの献げ物，イスラエルの指導者の献げ物，その他の献げ物の規定，献げ物に関する補足である。

まず，ナジル人とはイスラエルの中で神に捧げられた者である。（7 p. 850）その人たちにたいする献げ物の規定は以下のとおりである。

ナジル人の献げ物

民数記 6：2–12（表 2）

特別の誓願を立て，主に献身してナジル人となるならば，……してはならない。……ナジル人である期間中，その人は主にささげられた聖なる者である。…・そして八日目に，二羽の山鳩ないし家鳩を臨在の幕屋の入り口の祭司のもとに携える。祭司が一羽を贖罪の献げ物，他の一羽を焼き

表 2　ナジル人の誓願　民数記　6：1–21

6：10–12	髪を清める儀式・献げ物 贖罪の献げ物 賠償の献げ物	鳩	焼き尽くす
		鳩	
		雄羊	
6：13–17	贖罪の献げ物 和解の献げ物	無傷の 1 歳の雄羊 1 匹	焼き尽くす
		無傷の 1 歳の雄羊 1 匹	
		無傷の雄羊 1 匹	焼き尽くす

尽くす献げ物としてささげ，その人が負った罪を清める贖いの儀式を行うと，その日に髪は清められる。……

民数記6：13–20（表2）

……ナジル人である期間が満ちた日に，彼を臨在の幕屋の入り口に連れて来る。その人は献げ物として次のものを主にささげる。……祭司はこれらを主の御前に携えて行き，贖罪の献げ物と焼き尽くす献げ物と雄羊の和解の献げ物を，……ささげる。……和解の献げ物を焼く火に燃やす。祭司は煮えた雄羊の肩と……を主の御前に献納物として差し出す。それは，奉納物の胸の肉と献納物の後ろ肢と共に，聖なるものとして祭司のものとなる。

ここでは，「清めの儀式の献げ物－焼き尽くす」「和解の献げ物－焼き尽くす」の2つは焼き尽くすが，「賠償の献げ物」と「贖罪の献げ物」の二つは焼き尽くさない。6：19では煮た雄羊の肩，胸の肉，後ろ肢の3つが祭司のものと書かれている。

献げ物の動物のいずれを誰が食べるかについては以下に記されている。

ついで，イスラエルの指導者の献げ物について以下のように述べられている。すなわち，

民数記7：1–87（表3）

モーセが幕屋を建て終わり，聖別したとき，イスラエルの指導者，家長の長は進み出た。12部族の長である。そして12日間にわたって順番に献げ物をする。第1日目はユダ族のナフション，第2日目はイサカルのネタンエル……そして最後第12日目はナフタリのアヒラが献げ物をするのである。

この間，献げられた動物の合計は若い雄牛36頭，雄羊72匹，雄小羊72匹，山羊72匹で合計252（頭匹）である。（表4）そしてそのうち焼き尽くす献げ物は36（そのうち雄牛は12頭）で焼き尽くす献げ物はわずか7分の1ということになる。216（頭匹）が祭司たちの監督下で集う人々と共に食べられたのであろうか。

献げ物の補足という箇所（民数記15：22–27）では，贖罪の献げ物では以下のような記述がある。すなわち，同じ贖罪の献げ物でも，共同体全体の過ちであれば，共同体全体は若い雄牛1頭を焼き尽くす献げ物としてささげる。しかし，個人が過って罪を犯したときは，一歳の雄山羊1匹をささげなさいという。

民数記における献げ物の規定は民数記28–29章にまとめられていて，以下のようである。（表5表　1献げ物の意味とおさがりの肉はだれのものか）

3）祭司とレビ人に関する規定

民数記18：8–19

表3　イスラエルの指導者の献げ物（民数記　7：42–87）

7：12–17	第一日の献げ物	若い雄牛1頭	焼き尽くす
		雄羊1匹	焼き尽くす
		1歳の雄の小山羊1匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	
7：18–19	第二日の献げ物	若い雄牛1頭	焼き尽くす
		雄羊1匹	焼き尽くす
		1歳の雄小羊1匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	
	和解の献げ物	雄牛2頭	
		雄羊5匹	
		雄山羊5匹	
		1歳の雄の小羊5匹	
7：24–29	第三日の献げ物	若い雄牛1頭	焼き尽くす
		雄羊1匹	焼き尽くす
		1歳の雄の小羊1匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	
	和解の献げ物	雄牛2頭	
		雄羊5匹	
		雄山羊5匹	
		1歳の雄の小羊5匹	
7：30–35	第四日の献げ物	若い雄牛1頭	焼き尽くす
		雄羊1匹	焼き尽くす
		1歳の雄小羊1匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	
	和解の献げ物	雄牛2頭	
		雄羊5匹	
		雄山羊5匹	
		1歳の雄の小羊5匹	
7：36－41	第五日の献げ物	若い雄牛1頭	焼き尽くす
		雄羊1匹	焼き尽くす
		1歳の雄の小羊1匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	
	和解の献げ物	雄牛2頭	
		雄羊5匹	
		雄山羊5匹	
		1歳の雄の小羊5匹	
7：42–45	第六日の献げ物	若い雄牛1頭	焼き尽くす
		雄羊1匹	焼き尽くす
		1歳の雄小羊1匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	
	和解の献げ物	雄牛2頭	
		雄羊5匹	
		雄山羊5匹	
		1歳の雄の小羊5匹	

7：48–53	第七日の献げ物	若い雄牛 1 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		1 歳の雄小羊 1 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
	和解の献げ物	雄牛 2 頭	
		雄羊 5 匹	
		雄山羊 5 匹	
		1 歳の雄の小羊 5 匹	
7：57–59	第八日の献げ物	若い雄牛 1 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		1 歳の雄小羊 1 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
	和解の献げ物	雄牛 2 頭	
		雄羊 5 匹	
		雄山羊 5 匹	
		1 歳の雄の小羊 5 匹	
7：60–65	第九日の献げ物	若い雄牛 1 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		1 歳の雄小羊 1 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
	和解の献げ物	雄牛 2 頭	
		雄羊 5 匹	
		雄山羊 5 匹	
		1 歳の雄の小羊 5 匹	
7：66–88 第11, 12日の献げ物も10日と同じ	第十日の献げ物	若い雄牛 1 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		1 歳の雄小羊 1 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
	和解の献げ物	雄牛 2 頭	
		雄羊 5 匹	
		雄山羊 5 匹	
		1 歳の雄の小羊 5 匹	

表 4　イスラエルの指導者の献げ物（7：42–87）の合計

焼き尽くす献げ物	雄牛 雄羊 1 歳の雄の小羊	12 頭 12 匹 12 匹
贖罪の献げ物	雄山羊	12 匹
和解の献げ物	雄牛 雄羊 雄山羊 1 歳の雄の小羊	24 頭 60 匹 60 匹 60 匹
合計	雄牛 雄羊 雄山羊 1 歳の雄の小羊	36 頭 72 匹 72 匹 72 匹
12 日間	総合計	252

羊・小羊 144 匹＞山羊 72 匹＞牛 36

表 5　民数記の献げ物の規定（28–29 章）

28：3–4	日ごとの献げ物	無傷の 1 歳の羊 2 匹（朝夕 1 匹ずつ）	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	山羊 1 匹	
28：9–10	安息日	無傷の 1 歳の羊 2 匹	焼き尽くす
28：11–15	一日の献げ物	若い雄牛 2 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		無傷の 1 歳の羊 7 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
28：16–25	除酵祭の献げ物　第一の月の十四日：主の過越　十五日は祭の日	若い雄牛 2 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		1 歳の羊 7 匹すべて無傷	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	山羊 1 匹	
28：26–31	七週祭の献げ物 初物の日	若い雄牛 2 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		1 歳の羊 7 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
29：1–5	第七の月の一日の献げ物	若い雄牛 2 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		無傷の 1 歳の羊 7 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
29：1–2	第七の月の十日の献げ物	若い雄牛 2 頭	焼き尽くす
		雄羊 1 匹	焼き尽くす
		無傷の 1 歳の羊 7 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
29：12–19	第七の月の十五日 七日間のお祝い 一日目	無傷の雄羊 2 匹	無傷の若い雄牛 13 頭
		焼き尽くす	焼き尽くす
		無傷の 1 歳の羊 14 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
29：17–19	二日目	若い雄牛 12 頭	焼き尽くす
		雄羊 2 匹	焼き尽くす
		無傷の 1 歳の羊 14 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
29：20–22	三日目	雄牛 13 頭	焼き尽くす
		雄羊 2 匹	焼き尽くす
		無傷 1 歳の羊 14 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
29：23–25	四日目	雄牛 10 頭	焼き尽くす
		雄羊 2 匹	焼き尽くす
		無傷 1 歳の羊 14 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	
29：26–28	五日目	雄牛 9 頭	焼き尽くす
		雄羊 2 匹	焼き尽くす
		無傷 1 歳の羊 14 匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊 1 匹	

29：29–31	六日目	雄牛8頭	焼き尽くす
		雄羊2匹	焼き尽くす
		無傷1歳の羊14匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	
29：32–34	七日目	雄牛7頭	焼き尽くす
		雄羊2匹	焼き尽くす
		無傷1歳の羊14匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	
29：35–38	八日目	雄牛1頭	焼き尽くす
		雄羊1匹	焼き尽くす
		無傷1歳の羊14匹	焼き尽くす
	贖罪の献げ物	雄山羊1匹	

安息日以降のすべての献げ物には，日ごとの献げ物（28：3–4）にプラスされる形をとる

主は更に，アロンに仰せになった。「見よ。あなたには，イスラエルの人々が聖なる献げ物としてささげる献納物の管理を任せ，その一部を定められた分として，あなたとあなたの子らに与える。これは不変の定めである。神聖な献げ物のうちで，燃やしてしまわずにあなたのものとなるのは次のとおりである。

神聖なものとしてわたしに捧げられたすべての献げ物，

すなわち穀物の献げ物，

贖罪の献げ物，

賠償の献げ物

は，あなたとあなたの子らのものである。あなたはそれを神聖なものとして食べねばならない。男子だけがそれを食べることができる。それはあなたにとって聖なるものである。

……イスラエルにおいて奉納されたものはすべて，あなたのものとなる。人であれ，家畜であれ，主にささげられる生き物の初子はすべて，あなたのものになる。……しかし，牛，羊，山羊の初子は，贖ってはならない。これらは聖なるものである。その血を祭壇に振りかけ，その脂肪を焼いて煙りにする。これは燃やして主にささげる宥めの香りである。

肉は，奉納物の胸の肉や右後ろ肢の場合と同じく，あなたのものとなる。イスラエルの人々の主にささげる聖なる献納物はすべて，あなたとあなたと共にいる息子たち，娘たちに与える。これは不変の定めである。これは，主の御前にあって，あなたとあなたと共にいるあなたの子孫に対する永遠の塩の契約である。」

献納物（テルマー）は祭司のものとなる献げ物である（2 p. 269）。

民数記18：21

見よ，わたしは，イスラエルでささげられるすべての10分の1をレビの子らの嗣業（しぎょう）として与える。これは，彼らが臨在の幕屋の作業をする報酬である。

というように分量も決めている。

Ⅲ　神の動物への考えと人間の動物の扱い

1　呪術的意味あるいは異教の影響の排除

祭について

出エジプト記23：19

……あなたは子山羊をその母の乳で煮てはならない。

同じく（出エジプト記34：26，申命記14：21，）にも同じ言葉が繰り返されている。

《あなたは子山羊をその母の乳で煮てはならない》は子山羊や子羊を乳やクリームで煮て多産を求めた異教の女神アシェラにささげる儀礼との関連で規定されたもの。多産を求めた異教の祭儀に染まるのを禁じ，日常生活から異教の影響を排除することを目指している。レビ人祭司が，生活の場で民の指導，監督の責任を担うことを求めた規定である。

（2 p. 323）

カナンでは，子山羊の肉をその母の乳で煮て，神々にささげることがなされた。神々に滋養を供えてその生殖力を喚起し，豊饒を確保しようとする祭儀である。この規定はそれを排除するものであり，カナンの農耕祭の官能的性格を批判する物と考えられる。（2 p. 169）

これは，温情のある禁令というよりも，たぶん呪術的な意味のものであったと考えられている。しかし，当時幼畜の肉を乳汁で煮るという贅沢な料理が，賞味されていたとも考えられないこともないのである。（5 p. 342）

レビ記22：27–28

牛，羊，山羊が生まれたときは，7日の間その母親のもとに置きなさい。……あなたたちは牛または羊を屠るとき，親と子を同じ日に屠ってはならない。

これはまさしく温情のある禁令であろうが，とにかく，イスラエル人は牛，羊，やぎなどの子または生まれたばかりのものを一般に，肉食用に供していたこと

を知るのである。(5 p. 342)

脱穀する牛の保護

申命記 25：4

脱穀している牛に口籠を卦けてはならない。

従来からなにを狙った規定であるかが疑問視されている。通常言われているような動物愛護の精神から決められたものとは考えられない。この脱穀作業は収穫と関連する儀礼的な意味があったと考えるのが自然であろう。収穫作業の中心的な意義を占めるのが脱穀である。脱穀場（打ち場）は，宗教的な意味や戒めと無縁ではない。打ち場は神聖な場所であった。この規定は異教崇拝につながる要素を取り除き，作物に対する見方をヤハウェ宗教化させるための規定と見うる。(2 pp. 347–348)

2　神の厳粛な命令，動物への思いやり

十戒

出エジプト記 20：8

安息日に心を留め，これを聖別せよ。六日の間働いて，何であれあなたの仕事をし，七日目は，あなたの神，主の安息日であるから，いかなる仕事もしてはならない。あなたも，息子も，娘も，男女の奴隷も，家畜も，あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。

申命記 5：12–14

安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神，主が命じられたとおりに。…七日目は，あなたの神，主の安息日であるから，いかなる仕事もしてはならない。あなたも，息子も，娘も，男女の奴隷も，牛，ろばなどすべての家畜も，あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすればあなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。

ここに，安息日には人間だけでなく動物も同じように安息せよという神の命令である。

神の休息の戒めに家畜も従うようにという。これは神の動物に対する思いやりであるという。(9 pp. 32–33)

申命記 22：6–7

母鳥と雛鳥

道端の木の上または地面に鳥の巣を見つけ，その中に雛か卵があって，母鳥がその雛か卵を抱いているときは，母鳥をその母鳥の生んだものと共に取ってはならない。必ず母鳥を追い払い，母鳥が生んだものだけを取らねばならない。そうすれば，あなたは幸いを得，長く生きることができる。

これは単に人道主義的な行為を勧めているわけではない。母鳥，を雛や卵と一緒に捕らえるのを禁じており，おそらく一緒に調理して食べることを禁じた規定。儀礼的な観点から勧められたもの。(2 p. 338)

また，動物の方が人間よりも賢明なことが次の箇所に示されている。

3　人間より動物のほうが賢明－ろばより人間の方がおろかしい話しである。

バラムとろば

民数記 22：22–33

ところが，彼が出発すると，神の怒りが燃え上がった。主の御使いは彼を妨げる者となって，道に立ちふさがった。バラムはろばに乗り，2人の若者を従えていた。

1　主の御使いが道に立ちふさがっているのを見たろばは，道をそれて…バラムはろばを打って道に戻そうとした。

2　ろばは主の御使いを見て，石垣に体を押しつけ，バラムの足も石垣に押しつけたので，バラムはまた，ろばを打った。

3　主の御使いは更に進んできて，……ろばは主の御使いを見て，バラムを乗せたままうずくまってしまった。バラムは怒りを燃え上がらせろばを杖で打った。

主がそのとき，ろばの口を開かれたので，ろばはバラムに言った。「わたしがあなたに何をしたというのですか。三度もわたしを打つとは。」……ろばはバラムに言った。「わたしはあなたのろばですし，あなたは今日までずっとわたしに乗って来られたではありませんか。今まであなたに，このようなことをしたことがあるでしょうか。」…

主はこのとき，バラムの目を開かれた。…「なぜ，このろばを三度も打ったのか。……このろばは，わたしを見たから，三度わたしを避けたのだ。ろばがわたしを避けていなかったら，きっと今は，ろばを生かしておいても，あなたを殺していたであろう。」

目に見えない主が道におられることを人間のバラムは見えなかったが，バラムを乗せているろばにはきちんと見えていたのである。人間のほうがおろかしい。動物より人間のほうが偉いと思うのはうぬぼれであろう。偏見をもたないろばに，物事がよく見えているのに，頑固な人には，かえって見えないことを示している（主の御使いは通常見えている）(2 p. 279)。

4　人間同士が敵対していても彼の動物は尊べ

出エジプト記23：4–5

あなたの敵の牛あるいはろばが迷っているのに出会ったならば，必ず彼のもとに連れ戻さなければならない。もし，あなたを憎む者のろばが荷物の下に倒れ伏しているのを見た場合，それを見捨てておいてはならない。必ず，彼と共に助け起こさねばならない。

敵というのは，係争事件における相手側だと思われる。その審決を待つ事件を引きずることなく，動物を助けよと命じている。(2 p. 166)

動物を人間の関係の中に巻き込まず，神の生かす生き物として尊ぶことを戒めているのであろう。

ま　と　め

出エジプト記は紀元前1275年頃，民数記，申命記は紀元前1275～1235年頃のことである。(10)

出エジプト記には，カナンに向かうまでの40年間の荒れ野での生活は食べ物と水が不足したとある。しかし，民はうずらの肉を神からいただくというできごとによって肉を食べた。またシナイ山のふもとに築いた幕屋では神に献げ物をささげ，民は「神の掟を守る」という契約を交わし，和解の献げ物である牛の肉を神と共食した。

カナンの地を目前にした民は，異国の人々の神になびかずイスラエルの神の聖性を守るために，一方でカナンの人々との融合をはかるために掟・細則を編みだした。食べ物，とくに肉食の掟も例外ではない。

「肉食の掟」とはなにか以下にまとめた。

1「だれが」

幕屋で献げる肉は，献げ物の種類ごとに食べる人が決められている。民の場合，貧しい人弱い人を誘うことで，献げ物のお下がりの肉をお相伴できるよう配慮している。そして大切なことは肉を食べてよい人は「清い者」であることが望まれ，汚れている者は肉を食べることができないということが前提にあった。しかし，後に汚れた者も肉を食べることができるように変った。

2「いつ」

幕屋で肉を献げる儀式のあと，神との交わりのなかでそこに集う人々が分け合って食べる。その肉はその日のうちに食べる，あるいは，残りの肉は3日目には焼き捨てるなどというのもある。

3「どこで」

幕屋の祭壇に献げる。この場所こそ神がおられ，民が神と出会える場所だからである。

この場所で民は神と約束をかわし，その場で献げ物は料理されて食べられる。たとえば和解の場合，神との間で和解が成立し，神から肉料理をいただいてよろこび食べる。

4「なにを」

清い動物を食べよといわれる。それ以外のものは食べてはならない。清い動物とは「反すうする」しかも「ひずめが完全に分かれた」ものである。これは草食動物である。

肉を食べてもよいが，血はけっして食べてはならない。

5「どのようにして」

肉を神への献げ物にする。献げ物の種類は「焼き尽くす献げ物」，「和解」「贖罪」「賠償」などで，牛，羊，山羊の雄の子，初子などである。献げたあとそれをいただく。

6　動物の扱い，いたわり

人間より動物は秀でた存在であるという。

母鳥がその雛か卵を抱いているときは，人間は両方とも横取りしてはならない。必ず母鳥を追い払い，生んだものだけを取らねばならない。そうすれば，あなたは幸いを得，長く生きることができる。このようないたわりの話しがいくつも見られる。

お　わ　り　に

創世記において神が人間に最初に与えた食べ物は，「植物性食品（種を持つ草と種を持つ実，すなわち穀類と木の実）」であった。しかし，ノアの洪水のあと神は肉食を限定つきで許した。その限定とは「どうしても食べたいというなら食べてよい」というものであるが，これは神が人間に示した妥協だといわれる。その妥協はどのように実行されたのか，具体的に考察した。

本報告は出エジプト記，レビ記，民数記，申命記から創世記以後の肉食の様子を辿った。

その結果，「肉」は神と交わした掟の細則にしたがって，一定の秩序のもとで食べられていた。基本的には「神が聖であること－聖性」にてらして，民もまた「聖である」ことが求められた。肉食も例外ではなく「聖」というくくり（枠組み）のなかで取り扱われた。具体的には，食べてよい肉の種類はもちろんのこ

と，「どこで」「だれが」「なにを」「どれほど」食べるかまで規定されていた。それは多くの場合神ととりかわす儀式，すなわち献げ物であった。献げた肉は焼き尽くされる場合もあるが，多くの場合民は幕屋で神とともに共食した。民は神の臨在のもとで肉を食べながら和解，贖罪，賠償などをした。肉は正当な理由づけのなかで食べられたのであって，民がむやみやたら勝手に食べたわけではない。

引用文献

1　聖書　新共同訳　旧約聖書続編つき　日本聖書協会　1997

2　日本基督教団：新共同訳新約聖書注解Ⅰ創世記－エステル記　日本基督教団出版局　1996

3　Xavier Leon Dufour 編集　小平卓保　河井田研朗訳：聖書思想事典　p. 499　三省堂　1999

4　谷　　泰：神・人・家畜－放畜文化を聖書世界－pp. 134–135　平凡社　1997

5　橋本重太郎：聖書にみる動物の世界　同志社大学住谷篠部奨学金出版会　1971

6　G・フォンマン・ラート著　荒井章三訳　旧約聖書神学Ⅰ　イスラエルの歴史伝承の神学　p. 339　日本基督教団出版局　1983

7　旧約新約聖書大辞典編集委員会編：旧約新約聖書大辞典　教文館出版　2001

8　A・リンゼイ著，宇都宮秀和：神は何のために人を造ったのか　動物の権利の神学　p. 190　2001

9　チャールズ・バーチ，ルーカス・フィッシャー著，岸本和世訳：動物と共に生きる　pp. 32～33　日本基督教団出版局　2004

10　サムエル・テリエン著　小林宏　船本弘毅訳：新版聖書の歴史　創元社　2000